

〈成果刊行プロジェクト〉

館かおる編

『女性とたばこの文化誌——ジェンダー規範と表象』
の刊行について

(世織書房 2011年 578頁 ISBN 978-4-902163-36-0 C3036 5,800円+税)

館 かおる



本書は、たばこ総合研究センター（TASC）とお茶の水女子大学女性文化研究センター（1996年からジェンダー研究センター）との共同研究プロジェクトの成果としてまとめた7冊の研究報告書の論文をリライトし、再構成して刊行したものである。本研究プロジェクトは、1992年に、当時本学理学部教授と女性文化研究センター長を併任していた清水碩先生からの照会を機に開始され、2001年まで続いた。TASCとの共同研究なら「女性とたばこ」に関わる研究をしようと決め、研究プロジェクト名を「ジェンダー規範とその作用形態の研究」とした。その理由は、1990年頃の女性の喫煙をめぐっては、すでに喫煙タブー規範が存在していたが、女性の年齢や職業の違いにより、異なって作用していることに興味を抱き、ジェンダー規範の視点から分析したいと思ったからである。研究メンバーは、TASCから松浦いね主任研究員、そしてお茶の水女子大学から私と、当時大学院生や研究生、聴講生であった藤田和美氏、山崎明子氏、磯山久美子氏、サラ・ティーズリー氏、西山千恵子氏（1年目のみ参加）、ジェンダー研究センター教務補佐であった堀千鶴子氏、史学科助手であった中村文氏が参加した。

まず、本書の構成と内容の概要を紹介しておこう。

第一部「女性の喫煙規範の成立と揺らぎ」では、「男性は喫煙してもよい」が「女性は喫煙すべきではない」という、女性の喫煙タブー規範の成立の時期及びその要因、その後の展開過程を明らかにすることを試みた。江戸期の絵図や川柳等の資料からは、遊女、町娘、農婦、姑、尼、大奥の女たち等々、様々な階層、職業の女性が喫煙している諸相が抽出された。日本基督教婦人矯風会が推進した、未成年喫煙禁止法制定1900（明治33）年前後の展開は、女性の喫煙タブー規範の成立と呼応している。さらに大正期から昭和前期への移行期に登場するモダンガールの喫煙を追った。

第二部「たばこ広告とジェンダー表象」では、近代産業の販売商品となった、たばこの広告戦略を取り上げた。1904年に煙草専売法が施行され、たばこは国家の大きな税収となる。民営時代のたばこ広告ポスターは、紙巻煙草（シガレット）の登場により、激しい宣伝合戦が繰り広げられ、また日清・日露戦争時に、軍隊への献品（恤兵品）や恩賜品となり、戦争との結びつきが強まっていく。昭和30年代以降には、専売公社の広告戦略により、ニューフェースの女優や女子学生、主婦、職業婦人などを喫煙者としたポスターが登場する。昭和40年代には、広告規制により喫煙女性の姿はポスターから消えるが、テレビCMでは、たばこをめぐる男女のストーリーや解放された女性イメージがアピールされるという変容を示す。

第三部「メディアにおける女性の喫煙表現」では、流行歌、映画、小説、雑誌などのメディア媒体に現われた、女性の喫煙に対する意味付与を検討してみた。軍歌「戦友」や「カルメン」の劇中歌「煙草のめめ」、中島みゆきの「煙草」など、たばこをテーマにした流行歌は多い。昭和初期の映画作品に

において、女性の喫煙のシーンは、昭和モダニズムを象徴するものであった。同時期に、女性のキセル（刻み）喫煙とシガレット喫煙は、小説の中の女性像を描き分ける指標ともなった。

第四部「たばこ産業の中の女性たち」では、たばこ工場の女性労働者、たばこ屋の娘など、たばこを生産する女性、販売する女性の存在に注目し、そのセクシュアリティ表象や労働形態の分析を試みた。明治期の民営時代に、女性の煙草売りは、屋台や店頭での客寄せとして期待され、昭和戦前期には、たばこ小売店の「看板娘」は、歌謡曲にもなって親しまれた。松井須磨子が演じたカルメンは、実はスペインの国営たばこ工場の労働者であり、奔放なセクシュアリティの主体でもあった。一方、佐多稲子は、プロレタリア文学として『煙草工女』を書いた。工場内託児所に子どもをあずけながら働く煙草工女の姿は、別な局面での国営たばこ工場の位置を示す。

第五部「女性の喫煙倫理とジェンダー」では、喫煙女性を描いた小説や街娼の手記から、喫煙という「表現」が意味するものの分析を試みた。女性の喫煙タブー規範に抗して喫煙する女性主体を描いた小説家富岡多恵子の作品での「たばこ」は、ジェンダー規範を超越し、自我を確立した女性像に賦与される記号の一つとなっている。一方、戦後日本の占領下において、外国たばこを吸う街娼の姿は、規範逸脱者として批判、侮蔑の的となるが、彼女らの喫煙のポーズには、スティグマ化への反抗が垣間見られる。なお近年の「たばこ」への批判は、喫煙者の規範意識から、他者危害に対する喫煙倫理の意識化に向かっていることが「新聞投書」の内容分析からも伺われる。さらにWHOによる女性喫煙の分析や禁煙キャンペーンの展開、大学生等への回想記述調査から、喫煙・禁煙・嫌煙とジェンダー規範について「喫煙倫理」という視座から考察してみた。最後に「たばこ」のジェンダー分析を通じて得た知見をまとめ、巻末には本書における記述を中心に「女性とたばこ」関連年表（1869–2010年）を付している。

さて次に、本書の特色と意義について記して置こう。

第1に、本書の特色は、日本の近代を中心に「たばこ」をめぐる歴史的展開過程をジェンダー規範とその作用形態という分析視角から明らかにした点にある。「女性」「男性」と言うカテゴリーに属する存在は、性別二分化社会においては、ジェンダー規範に強く規定されていると捉えがちであるが、実際は多様な形態で存在している。今回試みた喫煙に関する事象も、女性への喫煙タブー規範は、いつの時代でもどの地域でも作用するわけではない。そもそも規範というものは、個々人に対し、行為を縛るものとして作用したり、反発して規範破りの行為になったり、あるいは、タブー規範が存在することも知らずに行為していたりする。このような「規範」が、喫煙においても、上流階級婦人や皇后、武士や貴族、農民の妻、労働者階級の女性といった階層・階級の違い、遊女や娼婦、農婦や商家のおかみ、女工、OL、作家などの職種による違い、そして年齢や民族などのその他の属性の違いにより、ジェンダー規範が重層的に作用したり、しなかつたりする。

J.W.スコットは、「歴史分析概念として有効なカテゴリーとしてのジェンダー」を提起した¹。「女性とたばこのジェンダー分析」を行った本書は、その具体的な研究事例として位置付けられ得ると思われる。

第2に、「たばこ」のジェンダー分析の際に用いた資料の多様さは、本書の特色である。近世の版本、ポスター・雑誌、テレビコマーシャル、流行歌、映画、小説、川柳、劇、新聞の投書、アンケート調査、WHO等の報告書などの具体的で多彩な資料から、喫煙の様相のみならず、禁煙、嫌煙、分煙といったコンセプトの内実も明らかになった。様々な資料を用いることで、「ジェンダー」に関わる分析をするという研究方法の有効性を説得力あるかたちで示し得たと言えよう。

第3に、この研究プロジェクトが、院生や若い研究者が「ジェンダー分析」の手法を身につける、恰好のトレーニングの場になったことの意義も看過できない。この研究プロジェクトは、1年ごとにテーマを決め、毎年報告書を刊行しなければならない。そのために、毎月1回、ジェンダー規範の作用形態はどのように抽出し分析できるかと、分析のテーマを決め、適切な資料を探して選び、アイデアを研究会で報告し、メンバー全員の共同思考の時を持ち、より対象に迫る資料を探し、論じ方を吟味し書きあげるという作業にメンバーたちは必死に取り組んだ。この繰り返しが、10年近く継続したのだ。不確かながらもアイデアを出し、手ごたえをつかんだ時の嬉しさが励みとなり続けさせ、具体的な事例を取り扱う中から「ジェンダー」という分析概念の有効性を体得する場となった。近代日本文学、近代美術史、表象・アート研究、スペイン研究、福祉学、日本近世史等を勉強しているメンバーが集まり、討議する場は、其々にとり貴重なものであり、自分の閾値を高める経験であったと思われる。

この研究を始めた頃、「たばこ」の弊害に対する取り組みの必要性がようやく日本社会にも浸透し始めていた。しかし、「女性とたばこ」をめぐる、「女性の喫煙タブー規範」の成立から始めた私たちは、世界のあらゆる地域にある「たばこ」をめぐる文化、習慣、社会の有り様は、人類にとって、長い歴史を有するものであり、歴史的スパンや当該社会での喫煙習慣を踏まえて見れば、薬功としてのたばこも存在することも知った。現代社会の嗜好の自由と他者危害の問題の解決は、とりあえず、分煙社会という新たな方策が立てられ始めた。なお、この間驚いたことは、色んな国から「女性とたばこ」に関する問いあわせがあり、共同研究の誘いもあったことである。

本書の刊行に対し、この時期に「女性とたばこ」の本の刊行など非常識といささか冷やかな反応の中で、歴史学者の成田龍一氏から「この論集は、ジェンダー規範と言う観点からたばこと女性の関係を考察しており、ジェンダー研究の確かな進展を感じさせました。」というコメントを頂いた²。執筆者其々の今後の研究活動の励みとしたい。

(たち・かおる／お茶の水女子大学ジェンダー研究センター教授)

注

- 1 Joan W. Scott, "A Useful Category of Historical Analysis," *The American Historical Review*, vol. 91, No. 5 (Dec. 1986), pp. 1053-1075. のちに *Gender and the Politics of History*, Columbia University Press, 1988 所収. ジョーン・W・スコット『増補新版 ジェンダーと歴史学』荻野美穂訳、平凡社、2004年参照。
- 2 『月刊みすず』2012年1-2月合併号93頁。